

# 教職大学院

## Newsletter

# No. 29

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since2008.4

2011.02.26

## ラウンドテーブルと学び合うコミュニティ

お茶の水女子大学教授 三輪建二

福井大学では、2001年から、地域や学校における実践の長い展開について時間を掛けて聴き合い、語り合う実践研究ラウンドテーブルが始まっている。この取組は後に、6月に開催される多様な分野の実践者が集う実践研究福井ラウンドテーブルと2月末の学校改革の実践を中心とするラウンドテーブル（学校改革実践研究福井ラウンドテーブル）、そして3月の探求ネットワークのラウンドテーブルに分化して現在に至っている。そうした福井大学のラウンドテーブルの展開には、当初から社会教育実践研究の交流と深化を目指す社会教育実践研究フォーラムのメンバーが関わってきた。その展開の背後には、社会教育における実践の共有の在り方を巡る試行錯誤の積み重ねが存在している。

こうした福井におけるラウンドテーブルの展開を受けて、私たちは、東京においても社会教育関係職員やNPO、ボランティア・リーダーなど、いわばまちづくりの担い手、「学び合うコミュニティのコーディネーター」を生涯にわたって力量形成していくシステムを築く必要があると考え、2005年1月からは早稲田大学で「実践研究東京ラウンドテーブル」を開催するようになった。この「東京ラウンドテーブル」は2011年には7回目を数えている。さらに各大学でも、例えば、早稲田大学では2006年10月に「早稲田大学第1回早稲田教育実践研究フォーラム」を、お茶の水女子大学では2009年6月に「第1回お茶の水女子大学ラウンドテーブル」を開催し、以後、毎年開催している。そして、いずれの取組においても必ずラウンドテーブルを取り入れている。

ここでいうラウンドテーブルは、少人数のグループで、実践を物語り、聴き合うことを共同で行い、学び合う一つの方法である。ラウンドテーブルの参加者は社会教育関係職員、教員福祉・医療・看護関係者、NPO・ボランティア活動の実践者などの専門職や実践者、及び実践者と共に実践研究に取り組む研究者や学生で構成されている。

いずれのラウンドテーブルでも、基本的には、「展開を語る／プロセスを聴き取る」と、「実践の語りから聞き取ったことについて語り合う」の2つで構成されている。

「展開を語る／プロセスを聴き取る」では分野の異なる人々が5~7名で1グループとなる。語り手は職場や地域などで自らが関わった実践について、実践記録を土台に実践の展開の道りについて物語る。実践記録はある程度長い時間的な展開を持って構成されたものである。

後半の「実践の語りから聞き取ったことについて語り合う」は、同じ領域・分野のグループでの集まりになっている。分野としては学校教育、日本語教育、社会教育、看護、保育、福祉、青少年などのグループなどになる。前半の「展開を語る／プロセスを聴き取る」において何を聞き取り、何を考えたか、自分たちの分野や実践に引きつけて語り合う。ラウンドテーブルのねらいは4点あると考える。

- ①時間を掛けて実践を振り返り、物語る機会にすること。
- ②その物語を、少人数でじっくり聴く機会にすること。
- ③自分たちの専門的な取組を、他の分野の人に分かるように伝えることにより、自分たちの実践をパブリックな仕事として位置付け直していくこと。
- ④大学に新しい実践研究のネットワークを創ること。

語り手はじっくり物語る機会を持つことで、準備段階で振り返り、物語る中で、また参加者とのやり取りの中で振り返り、さらに物語った後で時間を掛けて振り返るなど、何重もの省察が行われるようになる。

聴き手は、報告者の報告を巡って課題や改善点を指摘しがちであるが、実践の展開にじっくりと耳を傾ける聴き方をすることで、語り手は安心して自らの実践を振り返ることができ、今後の活動に生かしていくことができるようになる。

異分野の方々の話し合いを取り入れるのは、異なる領域の人々に物語ることを通して、お互いに理解し合える共通の言葉、共通の課題を創造することで、自らの仕事を公共的なものに位置付け直し、「新しい公共」を創り出していくことにつながっていくと考えるからである。

特に、4点目については、例えば、お茶の水女子大学には、対人援助職関係に絞っても、実に多くの社会人の方々が仕事をしつつ学んでいる。附属校の教員、大学院で学ぶ社会人大学院生、大学が実施する社会貢献の授業を通してつながっている現場の方など…。大学を舞台に、様々な方々が実践を展開しているにもかかわらず、お互いを知らないままになっている。ラウンドテーブルは、普段は深くかかわる機会の少ない異業種の方々のお話を聴き合う場になっており、ここから、大学キャンパスに新しい実践研究と研究ネットワークを創り出すことができるのではないかと考えている。

### 内容

ラウンドテーブルと学び合うコミュニティ (1)  
特集2：冬期集中講座に参加して (6)  
長野県伊那小学校公開研究会に参加して (12)  
書評 (15)

特集1：修了生の近況報告 (2)  
連携校だより (9)  
信濃教育会第5回公開研究会に参加して (14)  
報道ファイル (16)

# 特集 1 : 修了生の近況報告

本号の特集の一つとして、平成 22 年 3 月に本教職大学院を修了した現職教員の 4 名の方に現況報告していただきます。特に、今回は、教職専門性開発コースの 1 期生の報告も含まれています。4 名の方々の報告から、教職大学院での学びが、現在の実践や専門的成長、校内の協働研究等に生かされていることを感じ取っていただけると幸いです。

## 学校法人嶺南学園敦賀気比高等学校 布川 洋一（平成 22 年 3 月修了生）

昨年度、福井大学教職大学院スクールリーダー養成コースを卒業した布川です。私は、現在、敦賀気比高等学校で 1 年の学年主任として働かせていただいています。昨年度までの教務の仕事とは異なり、生徒や保護者の皆さんと触れ合う機会が多く、不慣れなこともあります。教務のころよりは教師の原点に一步近付くことができたように感じる毎日です。1 学年 200 人を超える生徒が、特進、進学、教養コースに分かれ、それぞれに異なる目標を持って高校生活を送るわけですから、様々な生徒がいて、様々な考え方の保護者の方々がおられます。この 1 年間で、かなりの生徒や保護者と面談をする機会があり、人の考え方や視点がいかに千差万別、十人十色であるかということを実感しました。

4 月の宿泊研修や春、秋の遠足など多くの行事がありました。その中で、どうしても写真家、松本紀生氏のフォトライブ講演会を 1 年生に見てもらいたいと考え、松本氏と交渉し、9 月 30 日に附属中学生も含めて学校で講演会を開催することができました。松本氏は 1 年の半分以上をアラスカの原野で一人過ごし、自然の撮影に専念しておられる方で、ザトウクジラ、アシカ、クマなどの生態やオーロラの美しさ、冬のアラスカに吹き荒れる猛吹雪のすさまじさなど、写真やビデオ映像を通して、優しく語っていただきました。その様子に、どの生徒も魅了されていました。そういう生徒の様子を見たり、感動を受けた思いをつづった数々の感想を読んだりすると、開催までの苦労も喜びに変わりました。

顧みて、自分は授業を通して生徒たちに、あのような心から引き付けられる瞬間を与えているだろうか？と、疑問を感じました。もちろん、答えは「NO」です。それどころか、相変わらずどうしようもない授業を繰り返している

のが現実です。先日も、自分の授業のつたなさにすっかり落ち込んでしまい、仕事を間違えたかなと、愚痴をこぼしていたら、同僚教員が、「この本を読んでみて」と、ある本を紹介してくださいました。『名言セラピー』という本でしたが、なるほど、とても前向きな気持ちになりました。その中にクロネコヤマトの小倉さんのこんな言葉がありました。「どこかに『好きな仕事』があるわけではない。目の前にある仕事を好きになるかどうかだ」。

教師という仕事自体もそうでしょうし、教師に与えられる役割（例えば、教務だとか、総務だとか、教育相談だとか…）もまた、そうではないでしょうか。

自分が納得できる授業をしたいという思いで、教職大学院の門をたたき、授業について考えることも以前よりは多くなったと思いますが、相変わらず、自分が納得できる授業というものには巡り会えません。私は、今も、「生徒にとって、よく分かる授業。生徒が教えられ、そして生徒自ら考える授業」を実践するということは何より大切にしたいと思っています。授業の善しあしは、授業者の資質によって大きく左右されるのだと思います。苦もなく生徒を引き付ける授業をされる教員は私の周りにもたくさんいます。残念ながら私にはその資質が備わっていません。だから、試行錯誤しながら、目指していくしかないのだと思います。昨年度の研究授業で、長谷川先生に「授業スピードが早過ぎるのではないか」という端的な指摘をいただいてからは、生徒の理解の度合を考えながら丁寧な授業を心掛けるようになりました。卒業してからこそが、本当の実践の始まりだという長谷川先生のお言葉を心に刻んで、日々の生活に流されることなく、これからも目標を持って励んでいきたいと思っています。また、いつか皆さんとお会いできる日を楽しみにしております。

## 鯖江市豊小学校教諭 藤川 洋平 (平成 22 年 3 月修了生)

教諭という立場で子どもたちとかかわって、もうすぐ1年が経とうとしている。小学校4年生の担任としてうまくやれているのだろうか。不安でいっぱいになりながらも、精一杯子どもたちと向き合ってきた。今回は振り返る機会をいただいたので、自分が実践してきた授業について振り返ってみよう。

授業を行っている時、自分の考えに自信を持っていない児童や一人では考えられずに思考を止めている児童がしばしば見られる。年度始めには教師が答えを黒板に書くまで待っている受動的な様子も見られた。そこで、児童が授業に能動的に参加するような授業にしたいと考えた。また、児童たちは他の児童の考えや教師の発言をきっかけに思考を深めていることが多い。つまり、コミュニケーションの中で考えを深めている。そこで、授業中に子どもたちが仲間と相談し合う機会を増やし、協働で学びを深めていく場面も取り入れたいと考えた。さらに、授業で共に学習している他の児童の発言をきっかけに学びが深まっていく授業を設けることで、自分以外の考えを大切にすることが身に付いたり、コミュニケーション能力が育ったり、様々な視点から物事を考える力が身に付いたりすることも考えられる。私は、このような考えから、自身の専門教科である算数の授業を中心に「子どもたちが協働で学びを深める授業」について実践を重ねてきた。

算数の「箱の形を調べよう」という単元の立方体や直方体について学ぶ授業(1月中旬実施)において、班で学び合う活動を取り入れた実践を行った。この単元では、展開図について学ぶことのできる自作教具を1人に1つずつ用意し、児童は、実際に操作しながら学習を進めていった。立方体や直方体という名称、立体の面や辺の数、見取図のかき方について学習した後、第3時に『てん開図を見つけよう』という学習を行った。立方体の組み立てが容易にできる自作教具を用い、児童一人一人に11種類ある立方体の展開図をなるべく多く見付けさせた。第4時には個人で見付けた展開図を班に持ち寄って意見を集約した。第4時では次のような話し合いが



各班で活発に行われていた。

児童A 「いくつ見付けた？」

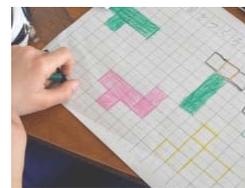
児童B 「9個あったよ。」

児童A (児童Bの見付けた展



開図を見て)「あれ？これとこれ  
って一緒なんじゃない？」

児童B 「あっ。これ、おれの  
にないわ。」



このように、班で意見を集約  
する際にはとても自然なコミュ  
ニケーションが行われていた。

この単元の授業は、自作教具を用いたことで、児童が課題に対して能動的に働き掛ける姿勢が見られ、他の児童の意見にも興味を持ち、学び合いが生まれていたと感じている。

しかし、子どもたちが学び合う授業を実践することが常にできたとは言えない。大学院時代に長期インターンシップで授業をさせていただいたことはあったが、十分に経験したわけではない。ましてや、専門教科以外の授業を思いどおりに実践することは予想以上に困難で、苦しかった。自分の目指したい授業が実践できていないことは何よりつらかった。そんな中でも、学校で共に働く先輩教員や大学院で一緒に頑張ってきた仲間、指導いただいていた大学院の先生とのつながりを大切にして、自分の目指したい授業を考え、実践してきた。

新たな環境の中で過ごした1年間は、今までの経験やつながりを生かし、精一杯子どもたちとかかわっていった1年間だったと思っている。大学院で学んだ自分の教師としての方向性、現場で日々学んでいる自分の教師としての方向性、それぞれを大切にしてこれからも子どもたちと精一杯かかわっていきたい。

## 「教職大学院で得た力を生かしながら」

茨城県立水戸養護学校教諭 山崎祥子（平成 22 年 3 月修了生）

昨年度、教職大学院の教職専門性開発コースを修了した山崎祥子です。縁あって、茨城県の教員採用試験に合格し、現在、茨城県立水戸養護学校で勤務しています。

水戸養護学校は肢体不自由部門の特別支援学校です。規模が大きく、校舎も広く、また、肢体不自由ならでは教育課程の多さ、県の違いによるシステムの違いや数多い初任者研修など、初めはとまどいの連続でした。

それでもやはり変わらず自分の励みとなり、支えとなっているのは子どもたちの笑顔です。私が所属する学年は重度重複の教育課程の児童が多く、身体の動きやコミュニケーションが難しい子どもたちが多います。しかし、そこには、そのような子どもたちを相手に日々、心を豊かにするためのやり取りを繰り返す教員がいます。初めは、子どもたちの表現（視線・表情・体の動きなど）から気持ちを読み取ること、子どもたちそれぞれの表現を知るのに苦労もしましたが、教員のかかわり見て、この子のこういう表情・動きは、こういう意思を表出しているのだと知っていくことができました。また、その子の気持ちを代弁して反応を返す大切さを知ることができました。そのように周りの教員に助けをいただきながら、今では、子どもたちと通じ合う喜びを日々感じています。

私がこの学校で最もとまどったことは、学年全体で授業を行うことです。私が所属する 2 学年では 12 名の児童がおり、そのうち重度重複課程の児童は 11 名です。そのため、一部の授業を除いて、ほとんどの授業を 11～12 名の児童らと行うことが多いです。実態が本当に様々なため、その中で個に応じた授業を行うことは大変難しいと感じました。また、その授業に携わる教員も多く、8 名前後の教員と連携して授業を行わなければなりません。T1 としてどこまで自分で行い、どこまで T2 以降の教員にお願いすると良いのか、とまどうことが多くありました。ただし、TT をうまく利用して、自分だけでは思い付かないアイデアをいただいたり、自分ではで

きないことをフォローしていただけたりするということは大きな魅力だと感じました。授業のための話し合いも、大人数で大変だと感じることもありましたが、教職大学院において、いろいろな世代の先生方と話す機会を繰り返し持ったことで、ベテラン世代、同世代、後輩世代の教員の考え方を知り、そして私自身が伝える力を付けてきたことは、この大人数での連携を持つために大変役に立っていると感じています。

また、もう一つ、教職大学院で得た大きな力は振り返りの力だと思います。新しい環境の中でも、日々の子どもの様子と自分自身のかかわり方を記録にとることや、その記録をもとに、子どもの変化を感じることで、それらを次の自分の行動に生かすことが自然にできていたと感じます。

茨城県では今年度から県での初任者研修の中で、「個に応じた授業実践レポート」を作成することを課題としています。年に数回（最低 3～4 回）の研究授業を行い、その中で児童の変容をまとめ、自分自身の授業の在り方をとらえ直すものです。このレポートは、昨年度まで教職大学院において作成してきた報告書ととても似ていると感じました。そのため、自分自身の日々のかかわり方や授業を振り返りながら、子どもの姿を記録し、変容を追うということが、とまどいなく行うことができました。

今年度で初任者と呼ばれる時期は終わり、来年度から本格的に担任という立場で子どもたちや保護者の方とかかわっていくこととなります。忙しさにのまれることなく、今後も教職大学院で得た力を生かしながら、子どもを見つめ、自分自身のかかわり、授業の仕方を振り返りながらより良いものにしていけるよう努力していきたいと思っています。

教職大学院を通して、私にいろいろなことを教えてくださった先生方に感謝申し上げます。

## 「取りあえずやってみよう」

あわら市芦原中学校教諭 佐藤 康裕（平成22年3月修了生）

教職大学院を修了し、間もなく1年が過ぎようとしている。今日までの自分を振り返ってみた。

### （1）研究主任として

研究主任として2年が過ぎた。1年目は、教職大学院との連携もあり、充実した1年となったが、今年度は、ちょっと休憩の1年になってしまった。しかし、私としては後悔しているわけではなく、少し突っ走っていた自分を、冷静に分析しながらいろいろな勉強をさせてもらった1年となった。研究部としての取組は半減したかのように思うが、大切なことはしっかりと教員や生徒たちの中に浸透している。今年度は実施できなかったが、来年度は他校の教員や諸機関の方々に来校していただき、本校に対するアドバイスをさせていただく機会を設けたいと考えている。

### （2）コア・ティーチャーとして

来年度は、本校のコア・ティーチャーとしてスタートすることになる。国語科を中心に授業改善に再チャレンジしようと考えている。同僚と楽しく進めたいと思っている。そのためにも3月後半から準備を進めなければ。研究会はやはり本校の定番となった「教科の壁のないグループ」スタイルで行いたい。



### （3）学年主任として

「スクールリーダー」。昨年度は大学院で何度となく聞いた言葉である。今年度は、本校で3学年主任を務めているが、「真のスクールリーダーとは？」と自問自答する日々であっ

た。とにかく口先だけの主任ではなく、冷静沈着かつ行動。そして決断力かなあ。同僚に、仲間を大切に楽しく仕事をしてもらうために、何をすべきか。自問自答はまだ続く。



### （4）研究所の講座に参加して

やはり、教師にとって刺激は大切だと再確認した。研究所で西村先生のお顔を拝見するたびに、「頑張らなきゃ」と奮起する自分がある。教職大学院の先生方にお会いするたびに、なぜか浮き浮きする。たくさんの刺激をもらって帰校するが、なぜか1人だと実行力が低下する。だから次回は、同僚と一緒に受講しようとその時は決意する。

### （5）後輩からの励まし

先日、大学院の後輩に当たる教員から、「長期実践報告を読ませてもらいました。今の私の悩みと重なります」と言われた。正直うれしかった。この教員ともっと語りたい。こうやって人とのつながりが生まれていくようである。

研究主任1年目の私は、チャレンジャーであった。とにかくやってみた。パワーの源は、同僚であった。そしてN教員の存在であった。1人ではできないことも、仲間がいればできる。そのことを教えてくれたのが教職大学院である。

今年度の本校は、校舎改修・2学期制導入・小中連携などで多忙な1年であった。しかし、来年度への準備は整いつつある。新生芦原中学校をぜひ見に来てください。生徒、そして教師はやる気満々でお待ちしております。

## 特集 2 : 冬期集中講座に参加して

### スクールリーダー養成コース 2 年 / 福井県教育庁嶺南教育事務所 辻村 完

昨年度、冬期集中講座に参加したときの学びとして次の文章が残っている。

12月25日、1年目をまとめる冬季集中講座に参加した。とは言っても、夏のサイクル3で考えたまとめのレポートがあるので、それを見直す程度に考えての参加であった。さらには、11月の合同カンファレンスや嶺南教育事務所での課内研修・所内カンファレンスを経て、少しずつ肉付けしてきたので、今回は、正直、「何をしようか」といった考えでの参加であった。1年履修の院生は、いよいよレポートの大詰めで、時間を気にしながら、レポート作成に集中している様子であった。来年の今ごろは…といった不安も感じながら、今年は、かなり気分は楽である。…

焦りがなく、楽な気分で参加していた自分がいた。しかし、今回は異なっていた。焦りまではないにしても、この集中講座でレポートをほぼまとめてしまおうという決意を持っての参加であった。集中講座のほとんどの時間帯は、レポート作成に費やしていった。

そのような作業の中で、改めて確認させられたこととして、「自分の変化」がある。文章を打ち、読み返す。また、文章を直し、打っていく…。繰り返していくと同時に、自分の考え・気持ち・関心などの変化に改めて気付かされた。時系列にレポートを作成していくことによって、レポートに登場する単語が変わってきている。ナラティブなレポートにはほど遠いではあるが、少しずつ物語風になってきているような感じがしてきた。また、他の院生とは異なり、ほとんど実践がなく、皆さんの研究から学んだことをまとめていっているにもかかわらず、いくつもの学びが生まれていることに気付かされた。この2年間、成長とまでは言えないが、自分の中に変化が生じたことは確かであろう。

変化の一つとして、「人から学ぶ姿勢」がある。これは、カンファレンスがすべてである。人と語り合うことや意見・質問を出し合いながらそれぞれの考えを紹介し合うことによって、これだけの学び合いがあることに気付き、自分の中に、「人から学ぶ姿勢」が生まれてきた。人と話をするのが更に楽しくなってきた。できるだけいろいろな人と話をしたくなってきた。でも、同じ人とでもそのときによって考えが変わり、違う意見も聞かれるため、同じ人との語り合いも魅力であった。とにかく、人から何か学べる。これだけは確かな実感である。

変化の二つ目として、「つながりを考える姿勢」がある。カンファレンスや集中講座のときだけでなく、自分の研究テーマとのつながりを考える姿勢ができてきた。個人的に楽しもうと思って読んでいる雑誌や何気なく見て楽しんでいるテレビ番組からも、自分の研究テーマとのつながりを求める自分がいる。しかも、無理にではなく、自然な感覚である。それだけに、そのような遊びの中からの学びの方が、印象に残ることもたくさんあった。

どちらも、2年前にはなかった姿勢である。23年間の教職生活の中で、「学び」においては大きな2年間であったことは間違いない。すべてが変化するわけではないが、この2年間で獲得した、新しい「学び方」がしばらく続くのは確かである。

最後の集中講座。レポートの完成は道半ばではあるが、この2年間の自分を見つめることができた。意義ある6日間であった。

### スクールリーダー養成コース 1 年 / 福井県立羽水高等学校 島田 一博

「M2は必ず両方に参加だが、M1は2度企画されている集中講座のどちらかに参加すればよい」と聞いていたので、それをそのままのみにし、年末の集中講座の時には部活動の

合宿を入れ、1月4日からの後半の集中講座に参加した。ところが、両方に参加したというM1の先生も何人かいたことを後で知り、私は学びに対してまだまだ甘い反省させられ

た。「片方に参加すればよい」でなく「片方だけの参加でもしかたない」だったのですね。そう言えば、自分の専門の数学でも、「A または B」は、「A だけでもよいし、B だけでもよいが、A かつ B (A も B も両方とも) でもよい」であったことを改めて思い出した。日本語も数学も難しい。

さて、冬期集中講座は、M2 にとっては、長期実践報告の最後の最後の詰めを行う場なのだが、M1 には、来年の長期実践報告のための中間報告書らしきものを作成する場であった。

紙面を借りてカミングアウトするが、「自己紹介」ばかりさせられる、「課題図書や実践報告書」ばかり読まされる、「ワープロ」ばかり打たされると、入学当初はかなり強く「やらされ感」を感じていた教職大学院の授業であった。しかし、最近は少し成長したのか、それとも飼いや慣らされたのか、「やらされ感」が少しずつ減り、「やらねば感」が少しずつ増えてきた気がする。だから今回の冬期集中講座での「1 日約 6 時間×3 日」の「ひたすらワープロ打ち」にも耐えられたのだろう。

この 1 年間、文系クラスの生徒にどうすれば数学の力を付けることができるかの工夫、数学科非常勤講師の指導、教育相談室の入口ドアへのメッセージカードの掲示、公開 (互見)

授業・研究協議会の実施等、試行錯誤しながら種々の取組をしているものの、研究の柱となるものがまだないのが実情だ。公開 (互見) 授業を研究の柱にしたいのだが、やっと 2 学期に 1 回実施できただけなので、中間報告するほどのこともない。そこで今回の集中講座では、振り返りから、未来に向けてのテーマを見付けてみようと考え、まず今までの教員生活 25 年を振り返ってみることにした。四半世紀前のことなど思い返せるだろうかと不安もあったが、ワープロにいざ向かうと、思ったより詳しく思い返すことができた。当時は言葉を知らなかっただけで「協働」らしきこともやっていた。3 日間で本校に勤務するまでの 20 年を振り返ることができた。恐らく、この機会がなければやらなかったであろう作業だが、教職大学院での 1 年間の学びのおかげで、価値ある振り返りができたと感じる。集中できた 3 日間のおかげで、中間報告書に書こうと決めた内容の約半分は出来上がったと思う。

現在、2 月 27 日のラウンドテーブルに向けて、中間報告書の残り半分以上を絶賛制作中のはずであるが、あの 3 日間の集中力はすっかり陰を潜め、ワープロを打つ手はほとんど進んでいない。そろそろカウントダウンも聞こえてきた。エンジンをかけ直して、何とか仕上げねば。

が・ん・ば・り・ま・す。

### スクールリーダー養成コース 1 年 / 越前市武生第三中学校 坂下 博行

今回の集中講座で、私たちのグループでは、それぞれの実践報告づくりの時間を多く取ることにしたため、クロスセッションを行いませんでした。そこで本稿では、1 日目の松木先生のお話と、2 日目の山下先生のお話を聞きかきして考えたことをまとめてみました。

山下先生からは「学校を変える」ことについて、前年度の校内リレー大会の実施要項をもとに、今年度の改善案を考えるという実践的な課題を出していただきました。頭をひねりながら考えてみると、それまで当たり前と思っていたことから脱却でき、新しいアイデアが皆さんから出てきました。頭の中にこびりついている垢を一度そぎ落として再考すると、本当に大切なことは何かということが見えてきた瞬間でした。とにかく「例年どおり」という前例踏襲主義がはびこる学校現場ですが、それでは学校の雰囲気はよどんでしまい、学校の文化は育っていかない。前例を踏襲しないというように教員

の意識を変えて、とにかくクリエイティブにやってみるといいう行動主義こそが、学校を変えるという先生の理念を学ぶことができました。また、学校の様子を地域に見えるようにすること、地域の方が学校にかかわりやすくするように敷居を低くすることの重要性について学ぶことができました。「子どもの成長を支えるのは、地域の人であり、文化であり、風土である。」というお言葉が印象に残っています。

松木先生からは、中教審教員の資質能力向上特別部会の中間まとめについて解説をいただきました。その要旨としては、今後 10 年間に大量の教員が退職し、経験の浅い教員が大量に誕生することが懸念されており、免許制度の改革も含めて、生涯にわたって学び続ける教員を作る体制づくりが重要であるということでした。

この「学び続ける」場には、主に大学での免許更新講習や教育委員会等が行う研修が含まれると思われませんが、教員に

とって一番身近な学校現場では何ができるのかを自問しました。先輩教員から新人教員へと知識や技能を継承していく機能を学校現場が強化しないといけないことが考えられます。その教員同士が学び合う場を設定することが、私たち教職大学院に学ぶミドルリーダーに期待される役割なのではないかと考えました。

私の勤務校では、今年度から「みつつの会」という話し合いの場を立ち上げました。

「つたえる」…教員が持っているスキルや知識を縦（世代）と横（周り）に広めていく。

「つながる」…授業や学級のことについて、学年を横断して話し合える雰囲気を作る。

「つくっていく」…武生三中のチーム力を作っていく。

ということを重ねている校内研修の場です。多忙化が言われている今だからこそ、学校の中で教師同士が学び合える機会が作れないかと設定したものです。大学院のクロスセッションで行っているように、自分の考えを他者に話すことによって意味付けをする、他者の話を聞きながら自分に置き換えて考えていくことで省察するという場になっていくのではないかと期待しています。

### 教職専門性開発コース1年 齊川 歩 (福井大学教育地域科学部附属特別支援学校インターンシップ)

私は、6日間(3日間×2)の冬期集中講座に参加しました。長いようで短い6日間でしたが、長期インターンシップでの学びを振り返る良い機会となりました。冬期集中講座では、主に長期実践報告の作成に取り組み、スクールリーダー養成コースの先生方の実践に触れ、共に話し合う機会もありました。この集中講座で、私は以下の二つのことが大きな学びになりました。

一つは、自分の学びのストーリーの理解についてです。長期実践報告を書くに当たって、自分のインターンシップについて記録を元に振り返ります。書きためていた記録は、毎日書いてその日のことを振り返っていますが、長いスパンでとらえることはできていませんでした。1年間のインターンシップの大半が終わった今、日々書きためた記録を読み返し、実践報告の軸となるものを見付けるために、自分が伝えたいことは何なのかを考えました。私は、インターンシップで週3回、附属特別支援学校に行き、一人の男子児童にかかわっています。子どもにどのような姿になってほしいか、どのようなことを大切に支援をしていくかということを考えながら、一緒に活動してきましたが、毎日のようにたくさん問題や悩みにぶち当たりました。その都度、子どものことを考え、自分の考えを見直したり、いろいろな方に相談などしながら方法を模索したりしてきました。日々悩んで行ってきた実践の跡を振り返ることで、私とその過程で子どもの見方

や関係を築く意味などを、文脈の中で学んできたと感じることができました。軸に沿って学びを文脈の中で意味付け直すことは、とても困難ですが、文章で書き表すことで、学びがしっかりと自分のものになっていくように思います。

もう一つは、自分の学びを意味付け直すということです。集中講座では、大半が自分の実践報告作成の時間になりますが、スクールリーダー養成コースの先生方や大学の先生方とのカンファレンスがあり、そこでの話し合いは実践を振り返る際の視点を見付けることができました。子どもとかわる中で、私は「できる・できない」で判断していたものが、子どもとのやり取りを重視するようになっていました。そのことについて、私が子どもにとっての評価者から理解者に変化していったという視点に気付くことができました。Nちゃんにとっての私という考えは、新しい観点でした。また、実践報告の中で何度も述べている『子どもと信頼関係を築く』という言葉について、自分なりの独自の言葉でもっと具体的に述べていく大切さを学びました。簡単な言葉で表される行為こそ、自分なりに表現することで、実践での学びが浮き彫りになってくるように感じました。

この集中講座で、インターンシップでの学びを振り返るとともに、新たな課題も見えつつあります。3月でインターンシップは終わりますが、ここで明らかになった課題を、次年度の実践研究につなげていきたいと考えています。

# 連携校だより

高浜町立青郷小学校  
松井 昭男

高浜町立青郷小学校は、福井県の最西端にある小学校です。グラウンドからは、若狭富士と呼ばれる青葉山が見え、学校の前には、高浜町の水源でもある関屋川が流れていて、自然豊かな町です。夏には、関西・中京方面から多くの海水浴客が訪れ、にぎやかな町になります。

本校では、毎年、保護者や地域の方々と共に子どもを育てていくという視点に立って、地域の方をゲスト講師に招き、「親子ふれあい体験活動」を行っています。全校児童250名がそれぞれ親子で活動したいコースを選びます。今年度は、次の14のコースを設定しました。

- |             |            |
|-------------|------------|
| ①室内レクリエーション | ②バルーンアート   |
| ③手品         | ④ピザづくり     |
| ⑤おもしろ科学     | ⑥ねんど細工(陶芸) |
| ⑦コンピューター    | ⑧竹細工       |
| ⑨お絵かき(はがき絵) | ⑩押し花       |
| ⑪クリスマスリース   | ⑫手づくりひこうき  |
| ⑬よさこいおどり    | ⑭ゆびあみ      |

親子で体験活動を行うことで、親子の絆を深めることを目的とするとともに、自分たちの活動したいコースを選択することで、異学年との交流の場にもなっております。子どもたちはもちろん、保護者の方もこの活動を楽しみにされている青郷小学校伝統の行事です。



また、本校は授業参観日を1日公開とし、都合が付く時間帯に子どもたちの様子を見にきていただけるような態勢を取っています。そして、青郷小学校の子どもたちをより多くの大人で見守っていただきたいという思いから、保護者だけでなく地域の方にも案内し、学校の様子を参観していただいています。

これらの活動を通して保護者や地域に信頼される学校を目指しています。

また、今年度は子どもたちが様々



な学習活動の中で自分の考えを伝え、友達の考えを受け止め、互いの良さを見いだしながら、共に高め合っていこうとする力の育成(学び合いの授業の研究)に取り組んでいます。

教職大学院に入学し、子どもの学びを見取る授業研究に出会いました。そこで、昨年度は子どもたちが話し合いによってどのように変わっていくのか「学びの姿」に注目しながら、伝え合う力の育成に取り組みました。その成果として、子どもたちがどのような思い・考えを持って授業に臨んでいるのかが分かり、子ども一人一人の学びの変化が見えてきました。また、その学びから、次時における教師の支援方法や指導方法が明らかになってきました。今までにはない充実した授業研究を行うことができました。しかし、子どもたちの発言を広げたり、深めたり、焦点化したりしながら、練り上げていくことが難しいという課題も出てきました。そこで今年度は、昨年度の研究テーマ「伝え合う力を高める指導の在り方を求めて」を継続しながら、一人一人の学びの変化を子ども同士の学びの変化に広げる「学び合いの授業」についての研究を進めています。子どもの学びを中心にした授業研究に取り組む姿勢が定着しつつあります。



## 福井県立美方高等学校 滝 民恵

プロジェクトチームの活動と教師の協働 高等学校における  
「教科の枠を越えた授業研究会」の意義

美方高等学校は昭和44年に開校し、一昨年度、創立40周年を迎えました。現在の生徒数は505名で、1学年が普通科3クラス、家庭学科2クラス（生活情報科、食物科）の計5クラス編成となっています。創立以来、「明・強・清」を校訓、「文武両道」を定是とし、平成22年度は「確かな学力と豊かな心を培い、国際的視野にたち、郷土を愛し、地域社会を担う人材を育成する。」ことを教育目標に掲げ、日々、教育実践に取り組んでいます。

運動部の中でもボート部をはじめ陸上部、剣道部は毎年、全国レベルの活躍をしています。学校行事では「校内レガッタ」という他校では経験



のでないボート大会があります。ラムサール条約湿地にも登録された美しい「三方五湖」の

湖面で、爽やかな風を感じながら全校生徒がボートをこぎ、競い合います。

地域の教育に対する関心は高く、地域唯一の高等学校である美方高等学校に対する期待度は非常に高いものがあります。家庭に関する専門学科である生活情報科は、ファッション、情報に関する知識と技術を習得するとともに、実社会で有効な資格と技能を多く取得することを目指し、食物科は、県立高校で唯一、厚生労働大臣の指定を受けた調理師養成施設として、「調理師免許」が取得できる学科です。普通科においては、文部科学省から中高一貫教育実践研究の委嘱を受け、平成17年度から地元の三方中学校・美浜中学校との間で、福井県型の「連携型中高一貫教育」の研究が始まり、本年度、全学年に連携クラスがそろいました。3校の教員が一堂に会して情報を交換し合う3校総会や、本校の英語と数学の教員が両中学校へ出向いて行うティーム・ティーチングは現在も継続して行われています。

福井大学から3人の先生方に本校の研究会に入っていただき、連携校として2年が経過しようとしています。私自身のことでは、これまでの教員生活の中でこれほど充実していた2年間はなかったといっても過言ではありません。美方高等学校において、上田校長から、キーパーソンとして各種の改善や改革に関する議論を活発化させるための方策の一つとして、「生徒のために自主的に活動し、部署や学年会の枠を越えた自主組織＝部長や管理職に意見具申していくプロジェクトチームを創る」という提案があり、6人のメンバーから成る自主的な組織であるMGP（美方元気プロジェクトチーム：Mikata Genki Project team）が結成されました。このプロジェクトチームの活動とプロジェクトチームを中心として昨年度、美方高等学校において初めて、「教科の枠を越えた授業研究会」を実施することができました。高等学校に

おいて教科の専門性を高めることはもちろんですが、教科の枠を越えて全員で授業を参観することの意味、ワークショップ形式で授業研究会を行うことや、生徒の学びを見取ることの意義を全教員が考えることとなりました。

また、今年度は、教科の枠を越えた授業研究会に加えて、教職員皆が集まって、生徒のためにSWOT分析を通して美方高等学校について真剣に考えたり、「主体的な学び」についてワークショップを実施したり、杉田教頭に講義を依頼して「授業力向上」という視点から研修し合ったりと、以前にも増して美方高等学校の学び合う学校文化や風土ができていないのではないかと感じます。



このように学校改革に向けて実践していく時に、教職大学院におけるこれまでの定期的なカンファレンスによって支えられ歩んでくることができたと思っています。特に、「傾聴」。共感的に聴いてもらえることによって、自分自身のこれからの実践の励みとすることができました。「傾聴」とは、人の実践に自分の実践を重ね合わせて接点を見付けていくことです。途中で問い返したり、事実や課題について尋ねたりすることで、学校種、世代を越えることの意味を見いだすことができ、この合同カンファレンスを切っ掛けに理論と実践の架け橋ができました。また、教職大学院の中心に据えられている実践研究、美方高等学校を拠点に新しい授業づくり、学校づくりのために大学院の先生方と協働して進めることができたことが礎となっています。

そして何よりも、美方高等学校には様々な実践コミュニティの存在があったことを実感しています。プロジェクトチームの会議は放課後、勤務時間を越えての実施でしたが、いつも、時間を忘れて語り合い、学校を良くするためにという大前提のもと、心をつなにする仲間と共に楽しみを持って取り組むことができたと思います。私は、彼らの熱心さと、私よりも若い世代ですがその発想の柔軟さと実行力に驚くばかりでした。そして、常にプロジェクトチームの活動を支えてくれていた管理職の存在の大きさを肌で感じています。

今年3月には美方高等学校卒業生が1万名に達する予定です。この節目の時に当たり、教職員一同、学校創立の理念を念頭に、日々、生徒の学びに寄り添うこと、生徒の「主体的・意欲的な学び」を大切に、全力で取り組んでいます。



## 福井県立春江工業高等学校 富田 裕之

「ものづくりはひとつづくり」

春江工業高等学校は「自主」「創造」「友愛」の校訓の下、「ものづくり」の精神や技術・技能を学ぶことによって、人間性を育てる教育活動を行っています。情報システム科、機械科、自動車科、電気科の4学科が設置され、全校生徒数は392名、そのうち女子生徒は16名です。教職員は54名おり、一人一人の個性に応じた教育を行っています。カリキュラムの特徴は、まず、工業高校であるため週3～7時間の実習の時間が組み込まれています。また、2年次から2科目4時間選択の時間があり、専門性や進学への対応がなされています。今年度の就職率は94%と高く、積極的に就職を考えている生徒の達成率は100%に近い数字になっています。大学への進学は20人、短期大学や専門学校も含めると31人となっています。



### ものづくり

学校祭での「製作コンクール」では、何か動くものを製作し、その作品が「春工のりもの広場」として、ハートピア春江等で地域の活性化のために一役買っています。生徒の作品に、地域の子供たちが乗ってもらうことにより、工業のものづくりの良さを肌で感じ取ってもらう絶好のチャンスとなっています。昨年度は、「春工のりもの広場」と「ロボコン発表」を組み合わせ、「春工イツ・ア・テクニカルワールド」として、丸岡中学校の体育館で開催しました。丸岡中学校の生徒や教員も童心に返り、とても楽しく参加していただくことができました。

今年度は、ものづくりの集大成として、竹田水車メロディパークに設置されるチャイム小屋の中に、見せる楽器として「たけだの響」を製作中です。坂井市が600万円を計上し、長畝小学校の竹田地区から通う子供たちも含めた児童生徒たちに、楽器の枠の部分の彫刻を依頼し、春江工業高等学校とのコラボレーションが完成しつつあります。竹田の里のオルゴールが奏でる癒しの音楽として期待されています。

春江工業高等学校が「春工のりもの広場」や「たけだの響」に見られるように、地域の方々に認識されるようになったのには、理由があります。

- ① 製作コンクールなどの行事でものづくりが盛んであったこと
- ② 乗り物として子供や地域の方々に安心して乗ってもらえるものであったこと
- ③ 地域のイベントで生徒が主となって活動してきたこと
- ④ ものづくりを通して、作品に相手の要望を取り入れるようになったこと
- ⑤ 地道な活動が、地域の方にも生徒の心にも受け入れられるようになったこと

このような活動が実になって、今年度の大きなプロジェクト「たけだの響」につながってきています。このような活動ができるのは、工業高校としての活動にプラスして、春江工業高等学校の学科の体制が他校と大きく違っていたことが挙げられます。ほとんどの学校が学科を単位として活動しているのに対して、本校では学科を超えた教師や生徒の交流があります。例えば、工具や材料の貸し借りはもちろん、他学科の製作に対して建設的な意見を述べたり、製作変更までも提案したりすることがあります。学校を挙げての活動では特に大切なものであり、このようなことがなければ実現できなかったかも知れません。

学力が重視されがちな今の世の中で、授業の中身を問うようなペーパーテストでは判断できない生徒の成長を見ることができません。生徒の心の変化や目の輝きを見ると、生徒が味わった製作の苦勞などはどこかに吹き飛んでしまうようです。生徒が、今後世の中で必ずや成功してくれることを期待するとともに、ものづくりが生徒の心の中にこれからもずっと生きていると信じています。



## 長野県伊那小学校の公開研究集会に参加して

教職大学院 森 透

毎年夜行バスで学生と先生方 20-30 名程で参加するのであるが、今回は学生の参加が少なく、私の車で学生 4 人、院生 1 人の合計 6 人で参加した。前日に伊那市内のホテルに初めて泊まったので比較的楽な旅であった。ホテルでは至民中の先生 2 人と偶然にお会いした。翌朝晴天の伊那市は冷え込み、車で校庭に入り、そこから階段を登って玄関まで行った。今回も全国からの参加者が多く、全体会では体育館がいっぱいで 1000 人近くはいたのではないと思う。自由参観授業は豚を飼っている 1 年生のクラス、特別支援のクラスを参観した。豚さんの飼育は 1 年生とは思えないほどしっかりと自分のやるべきことを担当していた。特別支援のクラスは 3 つのテーマ（巨大迷路・魚釣り・ボーリング）があり、どれも体験させていただいた。巨大迷路とボーリングは本格的で、先生方の支援があったと思うが、子どもたちは生き生きと取り組んでいた。

共同参観授業は羊の毛でマフラーや帽子を編む 3 年生のクラスを参観した。1 年生から羊を飼っているので、3 年目の集大成として羊毛で自分たちの好きなものを編むという活動。子どもたちは自分の編み方を熟知していて、担任はアドバイスに各グループを回っていたが、ほとんど必要ないほど集中していた。壁には 3 年間の羊さんとの活動が掲示されていた。分科会では初めてグループ討議を経験した。司会者が伊那小も最近はグループ討議を取り入れていると語っていた。私のグループは 15 名くらいであったが、一言ずつ自己紹介と感想を語りだしたらそれで終わってしまったが、全員が一言ずつ

語れたことはとてもよかったと思った。全国各地からの参加者であった。分科会最後の助言は、あの有名な百瀬司郎先生で現在は中学校の校長先生をされている。『はるみちゃん ローラ大好き』の著者である。助言の内容は的を得た内容深いお話しであった。伊那小での経験が今でも息づいていることを実感した。伊那小はそれらの先生方のネットワークに支えられていると改めて通感した。

体育館での 2 つのクラスの発表はいつも思うことであるが、深く感動した。本当に素晴らしい。一緒に行った院生は泣いてしまいました、と語っていた。大学教師の 3 人の鼎談はなかなか難しいチャレンジであったが、司会役の嶋野先生がうまくリードして展開されていた。この中に現場の先生（たとえば伊那小の研究主任）を入れるとまた違った展開も可能であったと思う。松木さんの「毎年伊那小で会いましょう。原点を求めて癒される伊那小で元気をもらいましょう」という発言が印象的であった。



福井大学大学院学校教育専攻 2 年 田中 一孝

私は今まで主に高校生とかかわってきたため、ほとんど未知の小学生がどんなものを見せてくれるのか楽しみでした。

総合的な学習として動物を飼うクラスが多かったので、私は、てっきり「命あるいは生きることについての学び」という目的ありきの実践だと思っていたのですが、教師たちの話

をよくよく聞いてみると決してそうではなく、子どもたちが遠足などの機会に動物に触れ「動物を飼いたい」という気持ちになったことがきっかけとのこと。そこから子供たちが主体となって目的を見いだしていったというのです。私が見たものは、動物と共に生きていく過程で、羊であれば「毛を刈

ってマフラーを作りたい、牛であれば「牛乳を搾って飲んでみたい」といった子供たちの思いを行動に移していく3年間の長い過程のほんの一端でした。教師主導ではなく小学生の自主性によって生まれたアイデアが教師の支援のもとで形になっていく、動物という教材を触媒とした子供たちと教師との化学反応とも換言できる不思議な現象に衝撃を受けました。その能動的な学びの中で去勢、出産、死別、屠畜といった生と死を目の当たりにして身も心も震えていた子供たちはその

瞬間確かに「生きて」いました。子供たちが物言えぬ動物たちから必死で感じ取った心の声は演劇を通してアウトプットされ、見ている人の心をも揺り動かしました。

化学反応においては双方の物質が変化し光や熱を放出します。子供たちが変わるということは教師を変え、周囲にも影響を与えるということではないでしょうか。私も子供たちとかわることで自分自身が変わってしまうような「化学反応」を生み出したいものです。

### 福井大学教育地域科学部理数教育コース 3年 竹原 奏恵

私は、伊那小学校の公開学習指導研究で、3つのクラスの実践を見せてもらった。学校近くの林でターザンロープやブランコを作って遊ぶ1年秋組の『『あきぐみランド』であそぼう』。子どもたちは林でリスを見たこともあるそうだ。空き地に家やたんぼや神社を作り、生活できる村を作る6年森組の“森組で暮らそう”。作った家で泊ったこともあるそうだ。自分たちで取った土で丈夫な焼き物を作る5年明組の“私たちの目指す『明組焼き』”。自分たちの土と陶芸用粘土を混ぜる割合を考えて試行錯誤を繰り返していた。上の3つのクラスを見せてもらったが、一番印象に残ったのは6年森組の実践である。それをもう少し詳しく紹介したいと思う。

6年森組の総合の実践の場所は、学校から少し離れた林の奥にある。そこに行ってまず驚いたのが、家が建っていたことだ。高床式の大きさ10畳くらいの大きな家である。家の中には、囲炉裏があり、2階があり、馬小屋が作られていた。2階までであるとは驚きである。木材をどうやって手に入れたのか森組の担任に話を伺ってみると、「選挙があったから選挙用のパネルをトラック何台か分をもらってきた。また、児童の父親が時折廃材を持ってきてくれた。」とおっしゃっていた。地域や保護者の協力があってこんなに大きなことができたのだと感じた。6年森組の実践のすごいところはそれだけではない。建てた家の近くにたんぼを作り、自分たちで米を育て

ていた。研究授業の日には、作ったかまどで炊いた御飯と、自分たちで漬けた

漬物とをふるまってくれた。とてもおいしかった。まるで、6年森組の児童が小さい農村に実際に生活しているかのように錯覚した。

6年森組はこれだけ作り上げるのに3年掛かったそうだ。私たちがやっている探求ネットワークの活動でもここまでできるともっと楽しいだろうと感じた。家を建てて生活するなんて正に私のロマンだ。しかし、広い土地がある伊那小学校だからこそできるのかもしれない。しかし、“総合学習の時間がつらかったことなんて一度もない”と言った森組の児童の笑顔を見ると、こういった実践を無性にやってみたくなる。私はまだ教員を経験したこともなく、教師の大変さを知っているわけではない。しかし、森組のような実践をすることを目標にこれから一層勉強に励んでいきたいと感じている。



## 信濃教育会第5回公開研究会

### —講演・稲垣忠彦「信濃教育会教育研究所10年の歩み」—に参加して

教職大学院 森透

去る1月22日(土)13時30分から長野市にある信濃教育会教育研究所で第5回公開研究会が開催され、研究所の所長を10年勤められた稲垣忠彦先生が10年の歩みをご講演された。ご講演のあとは、稲垣先生が所長時代に研修生であった第55期から第64期までの現職の先生方の代表者が、当時の思い出や現在の職場での取り組みをリレー方式でつないでいかれた。その後は、教育研究所を歴史的に支えてこられた代表的な方々に一言ずつお話ししていただいた。そのリレー方式の発言者を指名する司会進行役は稲垣先生で、優しい語り口の先生からのご指名で、みなさん一生懸命発言されていた。最後に、光栄ながら私もご指名を受けて、若干発言させていただいた。

会の全体的な雰囲気は、稲垣先生の醸し出す独特の空気が漂い、参加者一同、あまり緊張せず、のびやかに、しかし集中した空気であった。常に笑顔の稲垣先生のゆったりとした語り口に参加者は安心感を得て参加していたように思われる。この雰囲気・空気のもと教育研究所の実践研究が10年間展開されてきたことを改めて認識した。

私自身は、信濃教育会や長野県という様々な思い出がよみがえる。修論で松本にあった民権結社・奨国社の教育活動を調べたこと、総合学習で著名な伊那小学校に何度も訪れたこと、教育と研究で頑張っている信州大学教育学部の先生方とつながりができたこと、等々である。稲垣先生には昔からお世話になっており、先生の研究から多くを学ばせていただいている。稲垣先生は近代日本、特に明治期の授業研究・教授学の歴史を研究され、「定型」的な日本の授業のあり方を鋭く問い直した。私はそれらから学びながら、「定型」的な日本の授業を変革・改革しようとした大正・昭和期の様々な豊かな教育実践を私の視点でまとめたい、まとめなければならぬという使命感のようなものを抱きつつ、現在に至っている。

さて、稲垣先生のご講演は5つの柱で展開された。①着任時の願いと十年の歩み、②信濃教育会教育研究所とは何か、③2001年度からの変化、④「開かれた研究」と「現場への還元」を目指す、⑤私が学んできたこと、である。どの柱も感

慨深いものがあり、稲垣先生の研究者としての誠実な姿勢と研究と実践をどのようにつなぐのか、という真摯な問いを感じる事ができた。先生の半世紀にわたる長野県とのご縁の中で、修士論文・博士論文・「授業のカンファレンス」・「教師のライフコース」研究というご自身の歩みを紹介されたが、「歴史を伝えること」と「カンファレンスへの参加」を先生ご自身のテーマとされていることを改めて認識した。

この「歴史を伝えること」と「カンファレンスへの参加」を同時並行的に進めることを私自身は次のように考えたい。つまり、歴史的な実践の中に存在する授業・教師・子ども・学校・地域等々の息づかいと、現代の学校・授業・教師・子ども・親・地域・行政等々の内実を比較検討すること、そして歴史から学ぶとは何かを明らかにすること、教育の質的水準は常に過去よりも現代のほうが高いわけではないことの認識、を究明することにつながるのではないか。長野県師範学校附属小学校「研究学級」の総合学習の壮大な実験、奈良女子高等師範学校附属小学校の「合科学習」実践、東京・私立成城小学校の先駆的実践、そして福井県三国尋常高等小学校の「自発教育」での三好得恵校長と同僚教師の格闘等々、歴史上の豊かな脈(蓄積)は数えきれない。それらの豊かな実践と現代をつなぐことの意味とその難しさ。現代の実践には必ず歴史が存在する。歴史的な見方で現代の教育を見つめる。歴史的な見方で現代、そして未来を見通すこと。これが研究者にも実践者にも不可欠なのだろう

稲垣講演は「振り返り(reflection)」と「学び合い(conference)」、そして「事例研究(case method)」を何度も強調されていた。先生の生き方そのものである。協働研究者の副所長の牛山榮世先生のお話も感慨深いものがあった。稲垣先生はご講演の最後で言葉を詰まらせしばらく沈黙があった。私にはすぐには理解できなかったが、卒業された研修生の現職の先生が突如ご逝去されたとのことであった。会の終了後は、1時間程度その場で懇親会がもたれ多くの仲間が参加された。歴史を洞察し、現場の先生方と常に一緒に学び語り合う先生のご講演に触れて、改めて自分自身の今後を考える機会となった。(2011年2月3日)

# 書評

ネル・ノディングズ（佐藤学 監訳）「学校におけるケアの挑戦—もう一つの教育を求めて—」,  
ゆみる出版, 2007

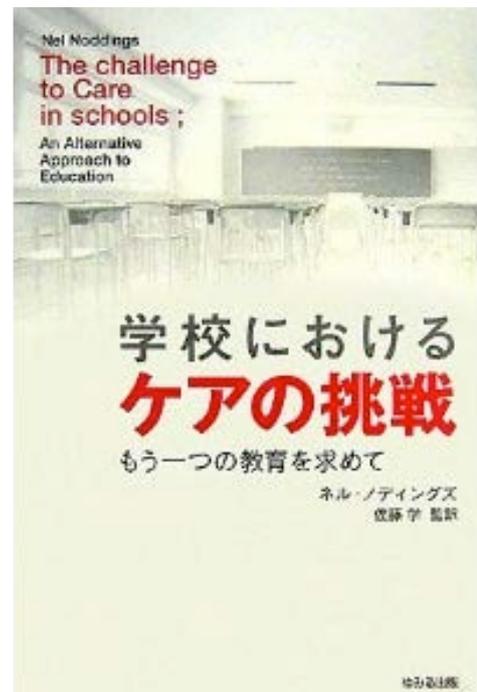
(Noddings, N. 1992 The challenge to care in schools. New York: Teachers College Press).

福井大学教職大学院 木村 優

知識基盤社会の出現と進展, PISA や TIMSS といった国際学力調査の言わばセンセーショナルな結果により, 学校そして教育にかかわる多くの人々の関心が子どもの知性的発達, すなわち「子どもは知識や能力をいかに獲得し, それらを応用的, 発展的に使用するか」に集まっている。このような現状に対し, 本書においてノディングズは「学校の第一義的な優先権が知性的発達にあるという致命的な観念をひとまず脇におかなければならない」とし, 言語, 美術, 数学, 理科, 歴史などのディシプリン (学問分野) とその一群であるリベラル・エデュケーションで構成され基礎付けられてきたこれまでの学校カリキュラムは, (1) 抽象的推論と合理性の狭い形式を強調し過ぎており, 情動, 具体的思考, 実用的活動, そして道徳的行為さえ無視している, (2) 精神的作業 (労働) が肉体的作業 (労働) よりも優れているという思い込みを付与する, (3) 女性と関係付けられてきた価値や態度を無視するか, 完全に省略している, と批評する。

そして, ノディングズは「ケアすることとケアされることは根本的な人間のニーズである」との観点から, ケアリングの倫理とその本質を現す「関係性」「対話」「責任」「関心」といったいくつかの概念でもって, 知識基盤社会における新たな学校カリキュラムを創造する必要性を提起する。本書各章においてノディングズは, 自身が数学教師として, 教育研究者として, 道徳哲学者として, そして一人の母親として, ケアリングと共に歩んできた体験と履歴を示しながら, (1) 自己へのケア, (2) 身近な他者へのケア, (3) 見知らぬ人へのケア, (4) 動物や植物へのケア, (5) 人工世界へのケア, (6) 理念へのケアの 6 つの対象世界へのケアを詳細に取り上げている。そして, ノディングズはこれら 6 つの対象世界へのケアを中心に現代学校教育をとらえ直すこと, すなわちディシプリンの関連性を吟味し, カリキュラムを再構成するよう述べている。

本書においてノディングズが「ケアを起点にした教育方法は反知性的ではない」と繰り返し述べるように, 彼女の主張は知識基盤社会における知識・能力観への過度な強調や熱狂に対する単なるアンチ・テーゼではない。学校においては認知的目標と同程度に関係性的目標や情動的目標が必要なのである。すなわち, 「私たちは, すべての子どもたちを有能さ (competence) にむけてだけでなく, ケアすることにむけても教育すべきである。私たちの目的が, すべての子どもたちを有能で, ケアをし, 愛情に満ち, 愛される, そうした人に成長するよう促すことに置かれるべきである」。



## 教職大学院報道ファイル

2011年2月15日(火)

TBS系列のニュース番組にて「板橋区教委、福井大と提携し教員養成へ」と題して、紹介されました。

板橋区教委、福井大と提携し教員養成へ



東京・板橋区の教育委員会が、福井大学の教職大学院と提携し、教員の育成を始めることがわかりました。東京の教育現場で地方大学が直接教員育成を行うのは、極めて異例なことです。

教員の育成を行う教職大学院は全国に25ありますが、ほとんどの場合、教員は1年以上休職して大学院に通わなければいけません。

しかしながら、福井大学では、教員が休職せずに自分の学校で授業を続けながら大学院で学ぶことができるよう、大学のスタッフが学校現場を訪れるシステムをとっています。

このため東京・板橋区の教育委員会では、来年度から福井大と連携し、こうしたシステムでの教員育成を行うことを決めました。

「大学院側が学校に来て、一緒に他の先生たちも巻き込んで勉強させてもらえるという制度をとってもらえるということで飛びついた」(板橋区 北川容子教育長)

教職大学院はいまも半数近くが定員割れするなど、そのあり方が議論されていますが、地方の大学が東京での教員育成に直接関わるのは極めて異例なことです。(15日 11:04)

### Schedule

**3/17 thu** インターンシップ事前説明会 (13:00-15:00)  
ザ

**3/23 tue** 学位記授与式(10:00-) 会場：フェニックスプラ

#### [編集後記]

Newsletter No.29号をお届けします。年度末の慌ただしい中、寄稿していただいた方々に心から感謝申し上げます。特に、今年度は、教職専門性開発コース1期生が教員として採用され、それぞれの学校現場で子供たちや同僚教員と一緒に頑張って頑張っています。スクールリーダー養成コース修了の教員も含めて、修了生の活躍が、福井大学教職大学院の評価を高め、私たちスタッフにも元気を与えています。これからも、「夢」をつなぐ仕事に誠心誠意尽力してまいりたいと考えています。(H)

教職大学院 Newsletter **No.29**

2011.02.26 発行

2011.02.26 印刷

編集・発行・印刷

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻

教職大学院 Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京 3-9-1 dpdtkfukui@yahoo.co.jp